

# いかにして深く生きるか —城山三郎 小説に経済を—

(株)日本設備工業新聞社  
代表取締役社長 高倉克也

死を覚悟して海軍に志願した17歳の愛国少年はすぐに軍隊生活に幻滅する。太平洋戦争の末期、墮落した上官たちは毎日のように怒鳴り散らし、暴力を振るい、部下が飢えているのに豪華な食事をして恥じなかった。

訓練中に終戦を迎えた若き日の城山三郎(1927-2007)は一夜にして価値観を変えた戦後社会にも違和感を覚える。国家とは何か、組織とは何か、人間とは何かという絶えまない問いかけは作家としての終生のテーマにつながった。

とりわけ城山は人間社会を成り立たせる根源的な営みとして経済に着目し、新たに経済小説というジャンルを切り拓く。実在の人物をモデルにしたリアルな作品は経済界から政界に及び、数々のベストセラーを生み出した。忌わしい戦時体験から城山は存在そのものが美学であるような指導者像を追究した。

## 言論の自由のない社会で

城山は愛知県名古屋市の商家に生まれた。本名は杉浦英一。名古屋市立名古屋商業学校(名古屋商業高校)から愛知県立工業専門学校(名古屋工業大学)に進学する。終戦の3カ月前、理工系学生の徴兵猶予を返上して海軍に入隊し、特別幹部練習生として特攻隊の伏龍部隊に配属された。

のちに城山は言論の自由のない当時の社会的風潮によって志願入隊を強制されたと語っている。

「私は志願して行ったんですが、あの時代はそうしなくてはだめだ、自分たちがお国のために命を投げ出して死ぬのが一番いいという考え方だったのです。それで私は行かなくてもいい海軍に行ってひどいめに遭って帰ってきたわけです」。

ひどいめとは規律の乱れた上官たちに「軍人精神注入棒というやつで追い回された」という異様な蛮行を意味している。食事にしても少年兵たちがイモの葉っぱを食わされてふらふらしているのに「上官たちは毎日のように天ぷらだ、とんかつだというわけで、士官食堂の掃除に行きますと、真っ白な食パンが<sup>かび</sup>黴で捨ててあるのです」というありさまだった。

終戦の翌年、城山は戦争によって中断した学生生活を取り戻そうと一橋大学に入学する。在学中は山田雄三教授に師事して理論経済学を学んだ。卒業論文は「ケインズ革命の一考察」。恩師との交流は後年『花失せては面白からず 山田雄三教授の生き方・考え方』で回想している。

卒業後、父の病気で帰郷し、岡崎市にある愛知学芸大学(愛知教育大学)で景気論と経済原論の講義を担当した。仕事の傍ら詩人の丸山薫の紹介で月1回の読書会に参加する。私生活では図書館



城山三郎

で出会った4歳年下の容子と結婚した。新しい生活と共に城山は「むちゃくちゃな戦争下の強いられた生き方と生活だけは書き残しておかなくてはいけない」と本格的に作家を志す。

## 金銭を見つめた知性

1957年3月に名古屋市城山町の城山八幡宮の近くに引越し、小説の執筆に精を出す。『輸出』と題した短編小説を書き上げ、文藝春秋社が発行する文芸誌の新人賞に応募した。町名の城山と三月を組みあわせてペンネームは城山三郎にした。『輸出』は晴れて文学界新人賞を受賞する。

同年12月に神奈川県茅ヶ崎市に転居し、1959年『総会屋錦城』で第40回直木賞に選ばれた。前例のない経済小説で脚光を浴びた城山は「大義はいかに変わりやすいものなのか。そういう怖さと、その中に生きる人間の葛藤を書いておきたい」と戦争の大義を信じて裏切られた体験を投影した『大義の末』を執筆する。実在の人物では1962年に上梓した『辛酸 足尾鉍毒事件』で公害問題に挑んだ田中正造の苦闘の足跡に迫った。翌年、愛知学芸大学を退職して作家業に専念する。

作家としての城山は『俘虜記』や『レイテ戦記』を書いた大岡昇平と新感覚派の横光利一の影響を受けていた。横光は株屋を題材にした『家族会議』のあとがきでヨーロッパの知性は金銭を見つめてしまったあとの知性であり、日本の知性は利息の計算を知らぬ知性であると述べている。イギリスの作家ジェームズ・ジョイスの『ダブリン市民』を愛読していたという城山の経済小説はまさしくヨーロッパ的な知性によって誕生した。

1960年代から70年代に城山は『雄気堂々』で渋沢栄一、『鼠 鈴木商店焼打ち事件』で金子直吉、『価格破壊』で中内功、『官僚たちの夏』で佐橋滋などを取り上げた。これらの人物は城山の基準で常にいきいきとしていること、いつもあるべき姿を求めていること、卑しくないことの3点を共通項としていた。1974年に刊行した『落日燃ゆ』では悲劇の宰相といわれた広田弘毅に光をあて吉川英治文学賞・毎日出版文化賞を受賞する。広田は東京裁判で処刑されたA級戦犯のうち唯一の文官で軍部に抵抗を試みながらも弁解はいっさいせず

軍人たちと同様に絞首刑を宣告された。1978年、堺商人の呂宋助左衛門を主人公にした時代小説『黄金の日々』を発表し、NHKの連続大河ドラマとなって全国に放映される。

## 猟犬のように仕事を追う

全盛期を迎えた城山は1980年代から90年代に一段と作品の幅を広げていった。『男子の本懐』で浜口雄幸と井上準之助、『粗にして野だが卑ではない』で石田礼助、『わしの眼は十年先が見える』で大原孫三郎、『もう、きみには頼まない』で石坂泰三、『運を天に任すなんて』で中山素平らの評伝に情熱を注ぐ。ノンフィクションでは『本田宗一郎との100時間』などが話題を呼んだ。

旺盛な文筆活動の一方で個人情報保護法の制定が本格化すると言論統制の再来になりかねないとして真っ向から反対の論陣を張った。「もし法案が通れば『言論の死』という碑をつくり、賛成した議員の名前をすべて列記する」と語るほど憤激していた。城山の愛読者だという首相の小泉純一郎には速達を出して廃案を迫っている。

2000年に妻の容子が癌で亡くなった。最愛の人の死後、娘の紀子によると「父は半身を削がれたまま生きていた」。それでも筆を折ることなく精魂を傾けて翌年『指揮官たちの特攻 幸福は花びらのごとく』を仕上げた。肺炎で城山が79年の生涯を終えたあと妻との思い出などの遺稿を整理した『そうか、もう君はいないのか』が出版された。

生前の講演で城山はイギリスの思想家ジョン・スチュアート・ミルの「My work is done」(わが仕事は為せり)を引用し、「このひとことを残して世を去りたい」と語っていた。漠然と生きるのではなく「問題はいかにして深く生きるか、である。深く生きるためには、ただ受け身だけではなく、あえて挑むとか、打って出ることも肝要」と主体的な生きかたをみずから実践した。

自宅の書斎は家族も寄せつけないほど厳重に遮断されていた。鉄の扉を開くと木の扉があり、さらに襖を開けないと入れない。晩年は自分を仕事を追っていく猟犬にたとえていた。孤高の猟犬はいつかくたびれ果てるまで3Bの鉛筆で下書きを行い、ペンを握りしめて原稿用紙と格闘した。